

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議（第49回）

議事録

日 時 令和4年5月13日（金）14:00～15:00

場 所 名古屋能楽堂 会議室

出席者 構成員

瀬口 哲夫	名古屋市立大学名誉教授	座長
丸山 宏	名城大学名誉教授	副座長
小濱 芳朗	名古屋市立大学名誉教授	
高瀬 要一	公益財団法人琴ノ浦温山荘園代表理事	
麓 和善	名古屋工業大学名誉教授	
三浦 正幸	広島大学名誉教授	

事務局

観光文化交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護室

報 告 (1) 令和3年度 全体会議及び部会での検討内容について

議 題 (1) 令和4年度 事業予定について
(2) 水堀における舟運について

配布資料 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議（第49回）資料

事務局	<p>1 開会</p> <p>2 あいさつ</p> <p>本日は、大変ご多忙の折、また足下の悪い中、当会にご出席いただき、誠にありがとうございます。昨年度は、延べ10回の開催をさせていただき、先生方からも貴重なご助言を多数いただきましたことを、心よりお礼申し上げます。今年度も引き続き、鋭意、名古屋城の保存・活用、調査研究を進めていきたいと思ひます。先生方、皆様方の一層のご指導、ご鞭撻をいただけますよう、お願い申し上げます。本日、第49回を迎える会議の議題となりますのは、令和4年度事業予定についてなど2点と、報告事項として昨年度の全体会議及び部会での検討内容ということで、ご報告させていただきます。限られた時間ではありますが、忌憚のないご意見をいただければと思ひます。よろしくお願ひいたします。</p> <p>3 構成員、オブザーバー、事務局の紹介</p> <p>4 本日の会議の内容</p> <p>資料の確認をいたします。会議次第、出席者名簿、会議資料が1から3までで、基本的には右肩に資料番号を記しています。具体的には、資料1がA3で2枚、資料1-1と1-2です。資料2については、A3が1枚です。最後に資料3は、資料3-1が5ページあり、資料3-2から3-5までです。構成員の先生方には、参考資料として、今年度の現状変更許可申請の実績をまとめた資料を机の上に配布しています。あわせてご覧いただきたいと思ひます。</p> <p>それでは、次第に基づいて本日の予定に入っていきます。まず初めに、昨年度の1年間に全体整備検討会議でご議論いただいた議題、内容についてまとめましたので、ご報告いたします。</p>
	<p>5 報告</p> <p>(1) 令和3年度 全体会議および部会での検討内容について</p>
事務局	<p>昨年度の全体整備検討会議および各部会の開催結果、概要についてご報告いたします。資料1-1をご覧ください。令和3年度における全体整備検討会議の開催結果をお示ししています。5月に第39回全体整備検討会議を開催して以降、延べ10回の会議を開催しました。左から順に、開催日、議事、主な検討内容を記載しています。その回で検討が終了した事項については、【済】と記載しています。また、1番右側に、各議事について関連する部会で検討した日程をお示ししました。例えば6月4日の議事③西之丸蔵跡追加調査を例に挙げると、まず6月4日に全体整備検討会議に付議し、その後、7月14日と8月25日</p>

	<p>に石垣・埋蔵文化財部会で議論しました。その結果を、9月3日の第43回と10月1日第44回の全体整備検討会議に付議し、第44回、10月1日の全体整備検討会議にてご了解いただき、その後、現在発掘調査を実施しています。その他、昨年度に引き続き、今年度も検討を進める事項については、議事の中で下線を引いてお示ししています。具体的には、「表二の門等の保存修理方針」、「余芳の移築再建」、「令和4年度の二之丸庭園の修復整備」、「水堀における舟運」、「名古屋城植栽管理計画」の5つです。</p> <p>続いて、資料1-2をご覧ください。各部会の開催結果をお示ししています。建造物部会を3回、庭園部会を5回、石垣・埋蔵文化財部会を7回開催しました。昨年度に引き続き今年度も部会で議論する事項について、議事に下線を引いていますのでご覧ください。</p> <p>簡単ではありますが、説明は以上です。</p>
事務局	<p>事務局からのご報告は以上です。ご不明な点やご質問がありましたら、よろしくお願いいいたします。よろしいでしょうか。</p> <p>それでは、昨年度はありがとうございました。今年度も引き続き、よろしくお願いいいたします。</p> <p>では、議事に移らせていただきます。ここからの進行は、座長にお願いいいたします。瀬口座長、よろしくお願いいいたします。</p>
	<p>6 議事</p> <p>(1) 令和4年度 事業予定について</p>
瀬口座長	<p>それでは議事を始めます。最初は、令和4年度事業予定についてです。いつものように説明の後に、構成員の皆様方からご意見を伺うという手順で進めさせていただきたいと思います。事務局から説明をお願いします。</p>
事務局	<p>資料2をご覧ください。令和4年度の事業予定について、現時点でのイメージを表にしたものです。個別の事業の詳細については、時間の関係上割愛させていただきますが、表の見方をご説明します。検討、または事業実施に係る想定期間を青色の帯状のバーで表示しています。◎が、それぞれの事項について、最終的に全体整備検討会議に付議する、おおよその想定時期を示したものです。事業によっては、昨年度からすでに付議し、現在検討しているものや、これから全体整備検討会議、部会、全体整備検討会議の順で複数回付議することを予定しているものなど、さまざまですが、◎が、計画の策定や現状変更許可の取得に向けて、最終的に全体整備検討会議に付議する想定時期として、お示したものです。</p> <p>例えば、上から4つ目の事項、本丸搦手馬出周辺石垣の修復における積み直し工事について、ご説明します。5月初旬から9月下旬にかけて実施設計を行い、その内容について全体整備検討会議や部会での議論を経て、最終的に10月の全体整備検討会議に付議したうえで、現状変更許可を取得し、12月から積み直し工事を行っていく、ということをお示ししています。なお、3月以降に伸びている矢印は、3月以降、来年度も継続して工事を行っていく予定であることをお示ししていま</p>

	す。
瀬口座長	<p>今ご説明いただいた事業予定について、ご質問、ご意見をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。</p> <p>では、私からお願いをしたいです。天守閣事業と本丸搦手馬出、それぞれの事業がいつからスタートしているのか、書いていただけませんか。天守閣事業は、いつからでしたっけ。西暦でいうと。</p>
事務局	2017年です。
瀬口座長	2017年。それから本丸搦手馬出は、21年目ということはわかっていますけど、西暦は何年ですか。
事務局	西暦でいうと、2002年が事業着手です。
瀬口座長	2002年。事業が、一番最初につかかったのが、
事務局	解体は、平成16年に開始していますので、2004年になります。
瀬口座長	それぞれの事業の長さ、西之丸、これはいつからか、表二之門。そういうのがわかると、全体の事業がどういう進捗状況かというのがわかるので。断面だけ見せられて、なんか進んでいるのか、進んでいないのか。一番上の天守閣整備事業で矢印がないのは、積み直しは矢印がありますけど、上の矢印がないのは、ここで事業が終わるということですか。
事務局	そうではないです。事業として続くという表現をしようとする、座長がいわれたように、矢印が続くようなかたちになります。これは、今年度やるという意味で、全体計画という書き方をしていますので、申し訳ありません。そのあたりをわかりやすく、お示しできるようにしたいと思います。
瀬口座長	<p>統一していただいて。事業全体の中の、その中の事業がまたあるわけだから、それを区別したほうがいいですね。馬出の解体がいつから始まって、その中にまたいろいろな事業があるわけだから。今の積み直しをする、解体をする中で、いろいろありましたよね。それがわかるようにしていただいたほうが、この全体の進捗状況がわかるかな、って思いますので、お願いいたします。</p> <p>ほかにはどうでしょうか。よろしいですか。特に、私だけの発言ということで、何かあればまたいただくということで。議事の2番目の、前回積み残しました水堀の件についてです。資料3について、事務局から説明をお願いします。</p>
	(2) 水堀における舟運について
事務局	前回の全体整備検討会議において、ご指摘いただいた内容をふまえて、今回は水堀の歴史的な経緯や遺構、現況等について資料を追加し、

改めてご相談させていただきます。

初めに1として、名古屋城水堀の概要についてご説明します。1の(1)近世の水堀の状況については、調査研究センターより説明させていただきます。

資料3-1のア、近世における水堀の変遷からご説明します。近世における水堀の変遷として、文献史料、絵図等の史料を検討した結果をご説明します。まず、慶長15年に水堀の完成として、名古屋城の水堀は堀、石垣の普請が開始された慶長15年に完成します。この頃は、雨水、湧水を水源としていました。図1の左側の図でお示ししているとおり、船着場設置箇所付近には、後述する辰之口のような排水施設は、現在は存在していますが、当時は存在していませんでした。水堀は、当時はまだ接続していない状況と思っています。

次に寛文3年、辰之口の設置です。築城後の城下町の拡大により地下水の利用が増え、台地からの湧水が減ったため、江戸時代の前期は水堀の水が不足するようになります。そのため、水堀に御用水が引かれ、水位の整備のために、図2の左の図で示したとおり、水堀の水を堀川の排水する施設として、辰之口が寛文3年に設置されます。

天明5年、辰之口流路の変更です。天明5年、名古屋城の北側を流れる大幸川が堀川に付け替えられたとき、図3の左側の図に示すとおり、辰之口の流路が一部変更され、大幸川の水が直接注ぐこととなります。現在、辰之口は封鎖され使用されていませんが、この流路の道は、現在も使っていないと思われます。

次にイ、船着場周辺の遺構です。実際に周辺に遺る遺構の検討結果を、ご説明します。船着場周辺の遺構としては、これまでご説明した辰之口および、辰之口南側外堀内面の石垣があります。辰之口については、船着場設置を予定している、すぐ西側にあります。その構造については、金城温古録には、その両側が石組みであること、底が南蛮たたきであることが記載されています。

3ページ目の図11をご覧ください。実際の遺構については、図11の真ん中の図でお示しするとおり、その前面が石組みとなっています。ただし、図11の一番下の図で示すとおり、側面の石組みは水堀側に切石、堀川側に割石を使用しています。石の加工の仕方に違いがあることから、近世のどこかの段階で積み直しを行った可能性があります。底の南蛮たたきについては、平成10年の護岸工事にともなって、辰之口前面に人工地盤が設置されているため、現在は確認できませんが、2ページ目の図6にお示した当時の施工写真を確認すると、底面にたたき面のようなものが確認できます。当時の施工資料を確認する限りは、取り壊しをしていないと思われます。辰之口の規模についても、金城温古録に巾九尺、総長三十間五尺の記載があります。巾については、実際の遺構の幅の実測値の2.62mと、実寸に近い数字になっています。総長については、樋の大半部分が土囊の下にあるため、現在確認できない状況となっています。そのほかの構造物に対しては、図11にお示したとおり、辰之口の上を通る石橋が東側、西側に2基あります。東側の石橋については、ドリルで採石をした痕跡があるため、近現代に設置したものと考えられます。西側の石橋については、図5の金城温古録に描かれた石橋と、実際の位置とは異なっていることから、近世に設置された石橋の可能性がります。

次に、外堀外縁の石垣についてです。辰之口以外としては、図11の

左側にお示ししたとおり、辰之口の南側に方形の石材を積んだ石垣が確認されています。この石垣は平成10年に水堀外縁に地盤ブロックが設置される以前、2ページ目の図8のとおり、側面に石垣が設置されていました。その設置時期については、石垣の表面を観察する限りでは、図9のとおり、築石の砕石の際にドリルで孔をあけていることから、近現代に設置された石垣の可能性があります。その他に、図10にお示しした尾張名所図会に、石垣のような構造物が描かれていることから、近現代の石垣の設置以前にも、石垣状の構造物が近世の段階で存在した可能性があると考えられます。ただし、金城温古録等には記載はなく、詳細については不明です。

次にウ、名古屋城における舟運についてです。近世における舟運に関する施設として、金城温古録には、水堀北側に御波止場、北御波止場、南御波止場、水堀西側に御船上場の記載があります。これらは城内への出入り、舟遊び、清掃等に利用されていました。このうち、船着場設置予定地点に最も近いのは、御船上場です。金城温古録の記載によれば、船着場より北へ約38mの位置に存在したと考えられます。ただし、金城温古録に記載された江戸時代の末期には、すでに崩壊されていたと記載されているため、現在は遺構等の確認ができない状況です。

続いて(2)の水堀の現況について3ページの右側をご覧ください。初めにア、水堀の概要として、水堀の面積、水深、湛水量を掲載しています。続いてイ、工業用水および水質についてです。水堀に設置されている工業用水については、昭和56年度に導入されたものです。平成の初め頃に水質は悪化し、平成7年度頃から、名古屋城外堀浄化対策検討委員会を設け、水堀の水質の状態についての検討が行われました。その結果、平成11年度から工業用水の導入量を大幅に増加することになり、現在は年間で約138万 m^3 の水を導入している状況です。工業用水の設置場所については、資料3-2の図面をご覧ください。工業用水については、天守の北側あたりの、水堀の北部から導入され、3か所の吐き出し口があり、城内に水がまわるように設置されています。現在の水深は、水堀の東側、斜線になった部分、東側のほうが水深が浅い状況になっています。

水質については、水堀内の4か所において、現在年に4回水質の調査を行っています。令和以2年度の調査結果を掲載しています。参考になりますが、名古屋市が定める水質汚濁に係る環境目標値は、現在のところクリアしている状況です。

水堀水位については、北西角の樋門において調整しています。自然増減を除いて、作業や工事などにあわせて年間で50cm程度水位を上下させています。

続いてウの外堀護岸改修工事についてです。外堀の西側の堀川の左岸等において、道路陥没等が生じたことを契機に、名古屋城の水堀の水がその原因と推測されたことが契機となり、昭和60年度・61年度、および平成10年度に大規模な外堀護岸改修工事が行われました。実施時期と実施の位置については、資料3-2をご覧ください。60年度・61年度と、平成10年度の2回に分け、その工事場所を図示しています。工事の内容については、いずれも護岸工や矢板工などです。

今回、船着場を検討している辰之口の前的人工地盤については、平成10年度の護岸改修工事の際に設置されたものです。広さは2.5m

×12.5m、周囲を4mの長さの鋼矢板で覆われており、埋土上部に厚さ10cmのコンクリートが打設されています。人工地盤の写真については、4ページの左側に記載していますので、ご覧ください。

続いてエ、その他です。城内全域の石垣については、現在年に3回程度の除草作業を行っていますが、今回水堀に面した外堀の石垣についても年に2回除草作業を行っています。

次に、2の水堀における舟運の概要についてです。こちらについては、前回の会議でもご相談した内容が含まれていますので、変更した部分を中心にご説明します。(1) 主旨については、変更はありません。続いて(2)の内容です。名古屋城の水堀は、大変広大なスケールを有しています。今回の舟運では広大なスケールを体感していただくことが、大きな魅力になるのではないかと考えています。水堀を船で周遊していただきながら、石垣や隅櫓、天守などの歴史的な景観を楽しんでいただくとともに、名古屋城の歴史や魅力を紹介していきたいと考えています。そのほかにも、船頭やガイドによる案内や、古絵図や古写真の活用、看板やパンフレットなどによる紹介を含めて、名古屋城の歴史や魅力の理解促進につなげていきたいと考えています。なお、事業のかたちとしては、まず船着場を設置したうえで、船の調達や運航事業を実施する事業者を公募する予定です。運航事業者や料金については、今後改めて検討していきたいと考えています。

続いて、5ページの(3) 運航経路についてです。運航経路については、水堀の南西側エリアから北側エリアにかけて、巡回するルートを想定しています。経路については、資料3-3の運航経路図をご覧ください。こちらについては、前回の資料から変更はありません。今回、追加の資料として運航経路からの眺望や見どころについて、資料3-4をご覧ください。運航を想定している経路付近に船を停め、その船から観えると考えられる眺望の写真を撮りました。①から⑩の写真です。こちらの写真にあるように、広大な水堀を体験していただくとともに、石垣や隅櫓などの眺望を楽しんでいただけるのではないかと考えています。左下には⑩として、辰之口の写真を掲載しました。詳細については、今後の検討になるかと思いますが、船着場からの遺構の見やすさや、看板等の設置についても検討していきたいと考えています。

次に(4) 船着場の設置についてです。船着場の設置場所については、水堀の南西の端、辰之口付近を想定しています。こちらの場所には、既存の設置物として先ほどご説明した、平成10年度に設置された人工地盤があります。今回、その人工地盤を活用して船着場を設置することで、遺跡への影響を最小限に留めていきたいと考えています。

資料3-5の船着場のイメージ図をご覧ください。資料の左側が船着場のイメージ図で、右上が平面図、右下が横断図となっています。先ほどご説明した既存の人工地盤の上に待合所となるようなデッキを設置し、階段もしくはスロープによって道路から待合所に降りられるようにしたいと考えています。待合所からは連絡橋を設け、実際に乗船をする場所については浮棧橋を想定しています。名古屋城の水堀は、水位が年間で50cm以上変動することがありますので、それに対応するために浮棧橋とし、水中にアンカーブロックを設置し、ブロックに結び付けて固定することを想定しています。

続いて、3 船着場設置に係るボーリング調査についてです。史跡への影響を最低限に留めながら船着場を設置し、遺構を損なわないこと

	<p>を考えるために、事前にボーリング調査を行い、許容荷重等を算出したうえで、船着場の施工方法や形状、安全性等について検討していきたいと考えています。調査の設定場所については、船着場の設置を想定している辰之口付近の人工地盤の部分です。資料3-5の平面図に、実施位置を記載しています。辰之口の遺構に影響をおよぼさないように、真東にあたる部分ではなくて、南の端に寄せたあたりで1か所、調査を実施していきたいと考えています。調査概要についても、ボーリング長20m、孔径は66から86mm。ケーシングパイプを使用し、最大掘削孔径は127mmを想定しています。調査の内容としては、地盤強度を確認するための標準貫入試験、地層条件および地層の土質を確認するための土質試料採取を行いたいと考えています。</p> <p>最後に今後の予定です。令和4年度については、ボーリング調査に係る現状変更許可申請およびボーリング調査の実施を予定しています。調査結果を受けて、今後の設計業務等について検討していきたいと考えています。令和5年度については、船着場の設計業務を進めるために、船着場の設置について全体整備検討会議にてご相談したいと考えています。その後のスケジュールについては、現在明記できていませんが、船着場の設置工事とともに運航事業者の公募を進め、運航開始にいたると考えています。</p> <p>説明は以上になります。</p>
瀬口座長	<p>資料3について説明を受けました。ご質問、ご意見がありましたら、よろしくお願ひいたします。</p> <p>前回の指摘を受けて、調べていただいた結果をご報告いただきました。</p>
丸山副座長	<p>教えていただきたいです。資料3-1の絵図のところに、矢印で辰之口と書いてありますけど。辰之口というのは、水堀のところの入口のことをいっているのですか。辰之口の、元の絵図で、大樋と書いてあります。図5です。金城温古録に、水道っていうんですかね。ここは、辰之口水道っていうほうが適切ではないかと思いますが。辰之口はあくまでも口だけだと思いますから。そのへんは、どうなのですか。</p>
事務局	<p>確かに、水道全体についても、金城温古録に辰之口水道大樋と書かれていますので、いわれるとおりです。</p>
丸山副座長	<p>もう1つ教えてもらいたいのは、図5を見ると、水堀のオーバーフローを排水するために堀川に流した、ということですか。樋がどういう役割をしているのかというのは、オーバーフローを堀川に流していた。それがだんだん減ってきて、その後にはだいぶ改変されたということですか。オーバーフローの仕組みといいますか。排水は、金城温古録を見る限りは、オーバーフローのことだけしかわからないですね。水がだんだん減ってきた、内堀の水堀が。そのときに水を入れるというのは、江戸期はどんなふうだったんですかね。わかれば教えてください。</p>
事務局	<p>水堀に水を入れる仕組みについては、図2の右側をご覧ください。水堀の北側に御用水があります。</p>

丸山副座長	御用水、ここから入れるんですね。
事務局	川の名前の正式名称はわかりませんが、一般河川から御用水という人工の水路を使って、ここから水を入れていたと思われます。
丸山副座長	オーバーフローは、辰之口から堀川へ流れていたということですね。ありがとうございます。
小濱構成員	人気のある周遊コースにするためには、このコースの中に観光ポイントがどれだけあるかということだと思います。観光ポイントは今のところ、船でぐるりとまわってくるだけで、石垣とお城の近辺みたいですが、2 ページの右側の下に書いてある、舟運に関する施設とかいうことで、船着場が設置されていて、これらは城内への大名の出入りとか、堀内での遊び、清掃等の際の船の発着場として利用されていた、と記載されています。これは、どの程度詳しくわかっているのですか。復元できるのですか。棧橋や船など。そういったものが復元できれば、復元というか、木造にすれば、多分大丈夫だと思いますけど。そういうものを造れば、観光のポイントが増えるのではないかと思いますけど。そこらへん、どの程度わかっているのか、お聞きしたいのですが。詳しく詳細がですね。
事務局	金城温古録には、このような船着場があったことは記載されていますが、構造などについては記載がなく、現在も遺構は遺されていません。詳細に復元については、難しいのではないかと考えています。
小濱構成員	そうですね。城内への大名の出入りというのは、どこを利用しているのですか。鶴の首のところですか。そこらへんは、全然資料はないのですか。
事務局	画面に資料3-2を映してください。搦手馬出の石垣の話に少し絡みますけども。ここに搦手馬出があり、搦手馬出のすぐ南側に埋門という二之丸から船にのるために階段があったとされている場所があります。その埋門の北側、水堀と空堀の間のところに、ここが南御波止場として、ここに波止場があったであろう、石垣が低くなっています。ここに遺構として今も遺っています。石垣とはいえない高さですけど、水堀ギリギリのところまで石垣が遺っています。これは聞いた話ですけど、おそらくこの北側に、北御波止場がどこかにあったであろうと。大名が船で渡ったというのは、1つはここの間、下御深井丸御庭のほうへ渡るとい意味合いであったのではないかと考えています。
小濱構成員	資料によると、現在船着場を予定している 38m北側くらいから出て、ぐるりと船でまわってそこまで行って、城内に入るというコースですね。そういう、少し施設などを造ってやれば、史跡に基づいた観光ポイントとして増えるのではないかと思います。そういったことを考えていただきたいです。そうすることによって、周遊の魅力がでて

	<p>くると思います。よろしくお願ひします。</p>
瀬口座長	<p>ありがとうございます。もう少し調べていくと、いろいろなことがあるのではないかと。それを船で観たときに、こういうものがありますよ、という。誤解を招きそうなものは、大名の出入りって、藩主の出入りというのは、なんとなくわかるけども。よその大名がここから出入りするの、という、誤解を招きそうな用語だと思いますけども。ちょっと気を付けていただいたらどうですかね。</p>
事務局	<p>以後注意していきたいと思います。</p>
瀬口座長	<p>よその大名が、ここから来るのは、</p>
事務局	<p>金城温古録等、記述はありますが、現地を確認しても、現時点で目視できる状況では遺っていません。そこについては、これまで調査行っていませんので、遺構でどういったものがあるか把握していないというのが正しいところです。まずは文献等の史料をもう一度よく精査して、見どころとして売り出せるものがあるのかどうか検討させていただきたいと思います。</p>
瀬口座長	<p>南御波止場の跡があるとすると、北のほうは工兵隊の用地になっていますね、きっと。従って、無くなった可能性があります。工兵隊の用地になっているということも史実にあって、船でまわるときには、そういう説明もあり得るのかな、と。しっかり調べて、あり得るのかなと思ひました。ありがとうございました。</p> <p>江戸時代は、御用水から給水されていたので、水が確保されていた。近代になって水がなくなって、工業用水を使うようになったので、1年間に3,700万円を使っている。それはなぜかという、水質を維持するために7回から8回、水を入れ替えている。こういう計算になりますよね。やはり水源のない堀というのは、なかなか難しい、ということが証明されたということではないでしょうか。江戸時代は、知恵があったから、このようにした。</p> <p>私はいつも、たたきにこだわっているんですけど、2ページに南蛮たたきと書いてあって、それはそうかなと思ひて。前のときに、三和土という表現がいつからかという質問をして、答えてもらえてないんですけど。近世は、ひらがなで書いてあったということが、この南蛮たたきでわかりますよね。三和土と書くようになったのは、近代ではないかという推察を前にしたことがあるんですけど。ここでも同じように、辰之口底の三和土面とあり、これも誤解を招きそうな気がするんですけども。三和土と書くと、現在のたたきの構成になってしまうでしょう。近世のときと同じような構成かどうかわかっていないわけです。じゃないほうが、可能性がありますよね。ここが少し気になったので、お願ひをしておこうかなと思ひました。</p> <p>よろしいでしょうか。この人工地盤のところに船着場を造ると、辰之口の排水口の部分がきちんと見えるようにするということですね。人工地盤と称するものが、排水口の真ん前にあるような気がするんですけども。その位置関係もどこかできちんと書いたほうが、気をつけて計画が作れるかと思ひます。</p>

事務局	気を付けて検討していきます。
瀬口座長	9ページに、図がありますね。資料3-5の右に、人工地盤の上にかけた船着場のところがあって、その右側のところに排水口の大樋の断面が、上から平面が見えますけど、石橋の両方にかかっている。東のほうは新しいものではないかと、いっているんですね。西のほうの少し見えているのが、近世のものではないかということですね。さっきのご説明によると。そういうことですね。
事務局	いわれるとおりです。
瀬口座長	ちょうど、真正面にかかっているので、少し気をつけないと、スロープになっているので、立ち止まると、人の動きを阻害するなど、何かありそうなので、注意していただきたいと思います。
丸山副座長	<p>これだけ水堀と堀川の、大規模な調査をするので、ぜひ歴史的なことを、どうかたちで、パンフレットにするのか。パンフレットにすると、ちょっと邪魔になるかもしれませんが。そういうことも、せっかくですから伝えるようなものを、冊子などを作って。先ほどいわれた埋門ですね。本来なら埋門まで行って、そこで下りて、埋門がどんなものかわかりませんが。観光ルートとして、水運もそうですが、埋門というのも珍しいので、そういうことも将来的に考えられないかなと思います。水深が50cmと浅くて、東のほうに行けないといのもありますけど。ぜひ、そういうことをする場合、歴史的なものを、単に船に乗って戻ってくるだけではなくて、そういう資料もここに加えてもらえたらと思います。</p> <p>もう1つ、除草と書かれていますけど、除草ではなくて除伐ですよ。樹木がかなり石垣から出ています。植栽管理計画を今後される中で、かなり石垣の上に危ない大木がありますから、そういう植栽管理も考えてもらいたいと思います。</p>
事務局	景観といった意味での植栽ですとか、景観を阻害するといった部分もあるかもしれませんので、今後考えていきたいと思います。
丸山副座長	難しいですよ。春のが多いですよ。桜がきれいに咲いていて、桜が終わったら、どういう景色ができるのかというのは、石垣と関わらないと樹木は、石垣にとっても危険ですからね。そういうのも含めて考えてもらえたらと思います。
瀬口座長	<p>ありがとうございます。ほかには、よろしいですか。</p> <p>金城温古録を見ていたら、堀の北側に桜か松が植わっていますね。道路際のところに。江戸時代の話です。今は柳か何か、違う木が植わっているので。船を舟運して、考えるのであれば、護岸はやり直すことは多分、江戸時代は全部石垣ではなかった可能性が高いわけだから。ただ立木ができなかったわけだから、そこところに植栽がしてあるという事実がね。あそこの街路樹も少し、完全な風致の回復にはなら</p>

	ないけども、植栽も長期的には検討していったら、船で観る人も適切に、よくなるかもしれないなと思いました。検討してください。
事務局	ありがとうございます。考えていきたいと思います。
瀬口座長	<p>ほかにはよろしいでしょうか。今度はこれ、部会のほうにまわることになると思いますので。史跡の関係がありますので、池底の関連もありますので、石垣・埋蔵文化財部会で検討していただいて、またここに戻していただく、というふうにしてもらいたいと思います。</p> <p>それでは以上をもちまして、本日の議事を終了いたします。進行を事務局へお返しします。</p>
事務局	<p>座長、ありがとうございました。先生方も、ご意見をいただきありがとうございます。本日は、議題としては少し少なめで、予定していたものは以上です。先生方、この後よろしければ、ちょっと雨が降っていますけども、今話題に挙げさせていただいた辰之口が近くにありますので、ご覧いただければと思っています。よろしく願いいたします。</p> <p>それでは、本日の全体整備検討会議は終了とさせていただきます。本日も、ありがとうございました。</p>